

難産・死産に備える

難産・死産を予防する

石井三都夫 (株)石井獣医サポートサービス 代表

はじめに

前項において、自然分娩で子牛が生きて生まれる正常産の進行の様子を述べた。それに対し人が介入する助産は、難産や死産を招く危険がある。死産が畜産農場に与える影響が大きいのは、明らかである。本項では、難産がなぜ悪いのか？ 子牛や親牛に対する影響について解説する。そのうえで難産の発生要因について今一度考察し、農場における予防対策として優先順位付けをしながらまとめたい。

分娩管理の目標を立てる

1. 農場における分娩管理のゴールは何か？

筆者自身、分娩をテーマとした研究や情報を長年発信し続けてきたなかで、「自然分娩」の良さや「早すぎる助産」のリスクに関しては畜産農場の管理者や関係技術者にもある程度普及されつつあると感じている。しかしながら、乳牛の分娩事故率(死産率)は依然として8%前後の水準を継続しており、分娩管理技術が向上しているとは考えづらいのが現実である。その理由としては、酪農場の大型化や乳牛の改良による牛の大型化あるいは高泌乳化に対しての施設改善の遅れが考えられる。また、それに伴う従業員確保のなか、酪農

や畜産業未経験者の就業が増加し、特に分娩管理技術の情報の普及伝達不足が課題となっている。我が国の畜産は国際的な競争力が求められており、取り巻く環境は今後厳しさを増すことが予想される。そのため、農場管理者は分娩管理の目標を立て、一丸となってそれに立ち向かうことが求められている。

2. 死産率の目標

死産率の平均が8%として、酪農家がまず知るべきなのは自身の農場の分娩事故率(死産率)であり、5%を超える農場には分娩管理上の問題があるとされてきた¹⁾。しかしながら、人の分娩事故率は1,000人に1人(0.1%)であり、乳牛に関しても農場により0%から数十%にのぼる農場まで、その事故率には大きな差がある。分娩事故率の目標が、とりあえず5%以下だとしても、5%に満足することなく、現状よりさらに低く、限りなく0%に近い水準を目指すべきと考える。

自然分娩を心掛ける

1. 自然分娩の死産率は低く、人為的介入により死産率は上昇する！

図1は、大型農場における1年間の分娩記録から分娩難易別にその死産率を調査した結果である。分娩難易が上がる順に、①自然分娩、②介助：1人での軽い